

第一節・武士の覚悟

1 ▼ 覚悟の原点

世の中が、なかなか変わらない。今の社会構造や思考様式では、わが国の未来はない、これ以上の発展はない、といわれて久しい。しかし、どうしてかと思うほど、流れが変化しない。なぜだろうか。

筆者はその原因の一つに、現代の日本人には覚悟がないからだと思う。大学で聞く学生の言葉は、真面目まじめにならなければいけない場面なのに、いい加減な発言が大変多い。それ以上に、大学教授の発言は無責任である。なにより国会中継を見ると、そういう言葉の連続だ。それは、相手から逃げ、自分からも逃げているのだ。覚悟がないのである。

覚悟は、言葉や理屈からは生まれない。言葉だけでは、どこまで本気なのか、わからない。それに対して、行動は、やるかやらないか、成功するか失敗か、誰の目にも明らかである。ごまかしが

きかない。つまり、行動するということは覚悟が要ることなのである。口先だけなら誰でもいえる。また、実践を伴わない言葉は、机上の空論である。そう考えると、身体をあまり使わなくなったわれわれにとつて、覚悟ができない、つまり理屈や文句はいつても、実際に行動するということが伴わなくなるのは、当然の成り行きである。

覚悟を持たないと行動はできない。ということとは、身体を軽視した人間観、世界観では社会を変えていく力を持たないということである。もちろん、行動一辺倒になると社会が危なくなる。社会も、人間同様、心身のバランスが大切だ。しかし、現代のような頭脳偏重の風潮を打破するためには、身体性の回復、身体性重視の思想が見直される必要がある。

武道思想の根底には、その実践者が武士であるから、必然的に、武士の生き方がその中核をなす。近世における武芸は、単に殺傷技術としての技にとどまらず、その修練の過程を通じて人間性を陶冶し、ついには思想にまで昇華していったのである。

そこには、身体の鍛錬を通じて精神の深化をめざすという考え方、つまり、身体性重視の思想がある。この身体性重視の思想は、中世における武士の誕生以来、わが国固有のものとして発達し、ついには武士特有の「道」として確立されたのである。

本節では、まず中世の武士にみられる身体性重視の思想を明らかにしたい。

2 ▼ 武士における道の自覚と身体

平安後期から中世にかけて、武士という社会的身分が確立されたといわれているが、その武士とは、自らの所領を守るための戦闘を生業とする戦士である。つまり、武芸の修練を日常的に行い、戦の際にはその武芸の能力をもって戦功をめざす職業軍人である。十一世紀中頃には、「兵の家」とか「武者の家」といわれる家が確立していたように、戦いのための技能を家業として専門的に行い、それを「家」を単位として継承していくという形態は、まさに中世における能楽や文芸にみられる「芸能の道」と同様である。

当時の戦場における戦いは、騎馬を主体とした弓矢戦であった。したがって、武士には、まず、馬に乗って弓を射る、つまり騎射弓兵にいかにか秀でるか求められたのである。武士たちは、これを「兵の道」と称し、武芸の実践者であることにより、武士として、自覚的に生きてきた。

鎌倉時代になると、正式に武士による軍事政権が成立した。政権を握った坂東武士たちは、より一層、武芸を重んじ、主に騎射三物といわれる流鏑馬やぶさめ、笠懸かさかけ・犬追物いぬおうち、巻狩などを盛んに行った。

流鏑馬は、馬場に並行して方板の的を数間おきに三個並べ、射手は疾走する馬上からのめがけて次々と鏑矢かぶらやを射るのである。当時、流鏑馬は武士階級における最も代表的な武芸であり、神事の際にも奉納された。



京都・葵祭(賀茂祭)前儀の小笠原流による流鎗馬神事

笠懸の由来は笠を的にしたところから出ている。後には、鹿の革を直径六十センチほどの半球形の的にして吊し、それを馬上から射るようになった。

犬追物は、円周約四十メートルの綱を輪にした囲いをつくり、その中に放たれた犬を騎乗して追いつけるものである。矢は、犬を傷つけないように、鎗矢を一層大きく作り直した曇目ひきめを使用した。逃げる犬を追いながら射るために、騎射戦の訓練としては最適であった。

巻狩は、多数の勢子せこと呼ばれる人足を使って、四方から狩場を囲んで鳥獣を中に追い込み、これを武士たちが捕らえるという練武的要素の高いものである。一一九三年、源頼朝が富士の裾野で大規模に行った巻狩は特に有名である。

このように、武士たちは、日頃から武芸の修練に励み、戦となれば「いざ鎌倉」と、我先に駆けつ

け、戦功を争ったのである。中世の武士たちにとって、武芸という身体技能を専門的に修練することが生活の基本であった。

さらに、ここにとどまることなく、武芸の鍛錬や戦いの場を通じて、生死や勝敗をものもしない死生観や、武勇を尊び、名誉を重んじ、臆病や卑怯な行為を否定するといった道徳観をも醸成していったのである。

3 ▼ 捨て身の覚悟

死の覚悟に立つ名譽の獲得、それは身体を最も危険な場所に置くという行為で表現された。武士には、身をもって示すことが求められたのである。戦場では言葉は意味を持たない。身体を使った働きこそ意味がある。

『宇治拾遺物語』には、新羅しらぎの国の人々が、人喰虎を「我が身の生き生かすは知らず。必ず彼をば射取り侍りなん」(我が身が生きるか死ぬかはわからない。しかし必ずあいつを射殺してみせましよう)と、実際にその虎を見事に射殺した日本の武士を「日本の人は、我が命死なんをも露惜まらず、大なる矢にて射れば、その庭に射殺しつ。なほ兵の道は、日の本の人には当るべくもあらず」(日本の人は、自分の命を少しも惜しまず、大きな矢で、虎を射殺してしまう。やはり武士の道では日本人にはとてもかなわない)と称賛する記述がある。

この記述から、当時のわが国の「兵の道」の精神が、命を惜しまない行為を生み出していたことがわかり、それが優れた武士の姿として描かれている。

当時の武士は、自分の「名」を上げ、後世に「名」を残すことが、武士としての面目だと考えていた。そして、戦場にあつて「名」を上げるためには、何よりも「先陣」を果たすことが求められた。

『平家物語』「巻第九 二度之懸」には、源氏方の武蔵国の住人、河原太郎、次郎が「武蔵国住人、河原太郎私市高直、同次郎盛直、源氏の大手生田森の先陣ぞや」というように一番乗りをめざしたことが記されており、また、熊谷次郎直実は、一谷の戦いで、「大音声をあげて、『武蔵国住人、熊谷次郎直実、子息の小二郎直家、一谷先陣ぞや』と名のつたる」（巻第九 一二懸）と、一番乗りを果した者が高らかに名乗りを上げる模様が記されている。この他にも、『平家物語』には一番乗りに関する記述が多くみられ、武士がいかに一番乗りを重視していたかということがうかがい知れる。

鎌倉武士の精神性が端的に表れている謡曲の「鉢木」にも、北条時頼と佐野源左衛門との会話で佐野源左衛門が「鎌倉に御大事あらば、（中略）、一番に馳せ参じ着倒につき、さて合戦始まらば、敵大勢ありとても、敵大勢ありとても、一番に破つて入り思ふ敵と寄りあひ、打ちあひて死なんこの身の云々」（鎌倉に事変があつたならば、誰よりも先に鎌倉に馳せ参じて、いくら大勢の敵であろうとまっ先に敵のなかに突入し、討ち死にする覚悟である）という記述があり、まさに一番乗りと

死の覚悟が主君に対する責務であり、見事な武士のありようとして描かれている。

また、当時の武士は、自分の出身地、名前を名乗り上げて戦うことを原則としており、先陣を取った時の名乗りはもちろん、集団戦においてもお互いが名乗りあつて一騎打ちで勝負するという戦闘方式が重んじられた。これは、お互いが名乗りあつて正々堂々と戦うという意味と、自分にふさわしい、いわゆる「相手にとつて不足のない敵」と対戦するための手段として行われたのであり、自分の名を上げるためには、それ相当の地位のある武士と戦い、首を取ることが求められていた。

ここで重要なのは、彼らは生きて帰れるとは考えていなかったことである。武士として生き、武士としての自責を肚はらに、武士の道を全うするため、死の覚悟をもって戦場に立ったのである。まさに身体をはった究極の行為である。

武士の道、武芸を専門とする者の宿命は、他の芸能などとは違い、その前提に死があることである。つまり道の自覚は、即、死の覚悟であつた。

■ 4 ▼ 一 所

源氏が開いた鎌倉幕府は、武士の主従・恩頼関係に基づく軍事国家であつた。それは、「弓矢とる身の習」「坂東武者の習」などと呼ばれる主従関係の固い結びつきを軸として成立していた。

そこで、主従関係という人間関係を中心に、そこにみられる身体性を重視する態度、思想をみて